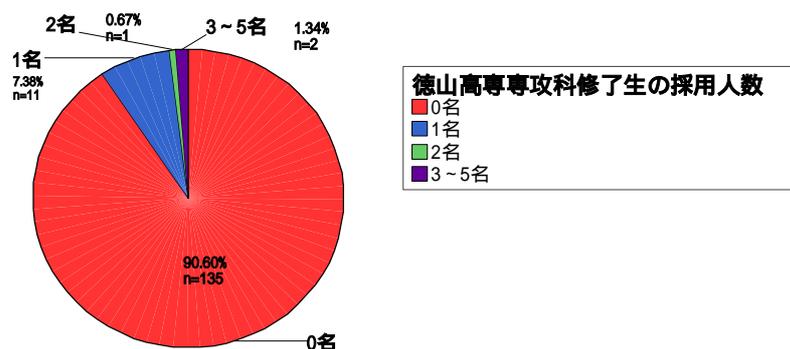


第4章 専攻科修了生に対する社会的評価

4.1 はじめに

徳山高専の本科卒業生あるいは専攻科修了生に対する社会的な評価を調査するため、それぞれが就職した企業および県内の各企業に対するアンケートを実施した。

本章では、その中で徳山高専専攻科修了生に対するアンケート結果に焦点を絞り、本科卒業生との比較を行いながら、企業側から見た専攻科修了生の評価について分析を行った。なお、本アンケートを送付した企業のうち、徳山高専の専攻科修了生を採用している企業は、下図のように14社であり、アンケート総数に占める割合は約10%（徳山高専以外の専攻科修了生は16%）であった。以下、各アンケート結果についての分析を行う。



4.2 アンケート結果の分析

(1) 徳山高専の専攻科修了生の平均的な仕事（勤務成績）に対する評価【企業質問2】

図4.1に示すように、“非常に満足”と“満足”を合わせて63%であり、採用した企業の約3分の2が勤務成績は良好であると評価している。なお、“不満”と答えた企業も6%あった。

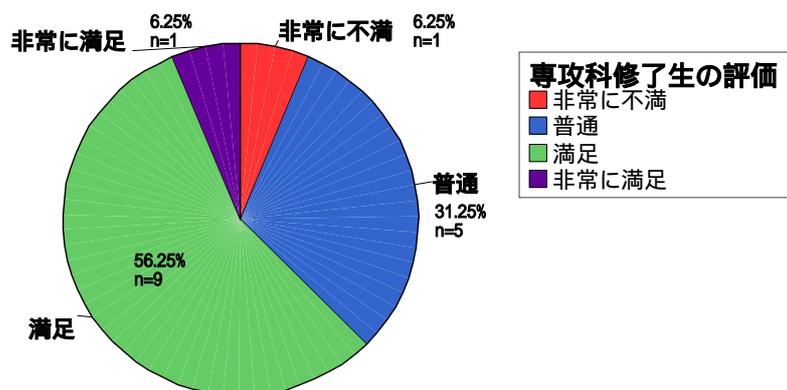


図4.1 徳山高専の専攻科修了生の平均的な仕事（勤務成績）に対する評価

(2) 徳山高専の複合教育に対する評価【企業質問3】

この質問は、徳山高専本科卒業生を採用した企業の回答も含めたものであるが、“適切である”と答えた企業が82%にのぼった。複合教育については、社会的にもその有効性が認められていると思われる。

(3) 徳山高専の教育目標に見合うだけの実力がついていないかについての評価【企業質問4】

6項目すべてについて、4段階評価の“3”が7～80%あり、本校の教育目標に見合った実力が概ね身につけていると判断されている。なお、この傾向は本科卒業生に対しても同様なものであった。専攻科について特徴的な項目を挙げて以下に2項目である。まず一点は、項目2の“国際理解を深め、技術者としての倫理観とコミュニケーション能力を養う”という項目について、2と4の評価がほぼ同数で若干高めの傾向にあったことである。これは、英語の能力が十分身につけていると判断された企業とそうでない企業とがばらついてきたためと考えられる。しかし、本科卒業生の結果と比較すると、項目2の割合が減り、逆に項目4の割合が増えていることから、専攻科で語学を含めたコミュニケーション能力が養われたということであろう。次に、項目5の“複合分野にわたる知識を有機的に結びつける設計能力を身につける”という項目で、2の評価が20%以上あった。複合分野の専攻の修了生ではあるが、習得した各専攻の知識を結びつけるまでの実力がついていないか、あるいは専攻以外の知識を必要としている企業もあることが考えられる。

また、教育目標の中で重要と思われる項目を聞いたところ、項目6の“課題を把握し解決する能力を身につけ、感性、創造性を養う”という項目が62%、項目4の“自主性自立性を養う”という項目が44%となった。企業は、与えられた仕事をこなすことよりも、自分から課題を見つけ、問題を解決することができる人材を求めていることの現れであろう。

(4) 専攻科修了生の英語力評価【企業質問5】

これは、徳山高専のみならず一般的な高専卒業生を採用した企業の回答である。図4.2に示すように、“満足”が7%、“普通”が67%である。本科卒業生より不満の回答が減少している。学習目標の達成度で述べたことと同じ傾向である。

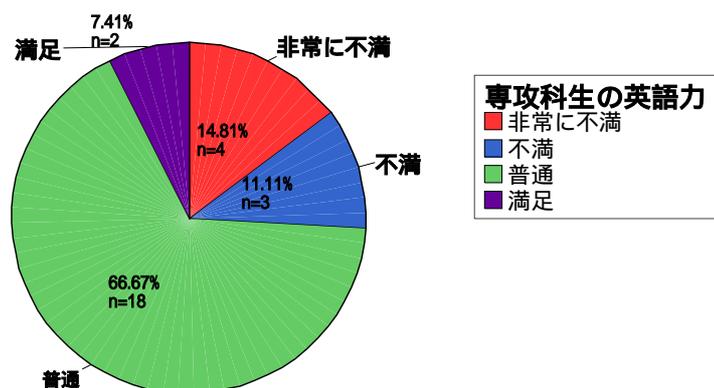
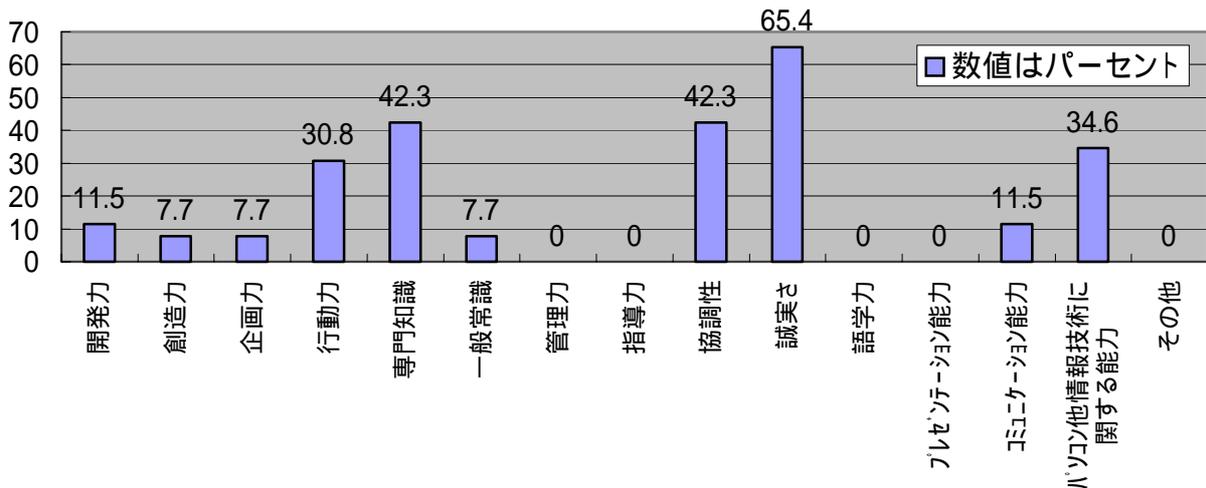


図4.2 専攻科修了生の英語力評価

(5) 大学の卒業生と比較した場合、優れている点について【企業質問6】

これは、徳山高専のみならず一般的な高専卒業生を採用した企業の回答である。図 4.3 に示すように、“専門知識”の評価が 42%であるのに対し、“誠実さ”が 65%，“協調性”が 42%となった。これはアンケート内容を企画した側から見るとむしろ以外な結果である。高専卒業生の専門性よりも人間的な面を評価されている。これは、一つのグループとして開発や設計あるいは現場の業務にあたる場合には、非常に重要となる素養である。高学年までホームルームが存在する高専が、大学とは異なる教育効果を生んでいる良い例であろう。

図 4.3 大学の卒業生と比較した場合、優れている点



(6) 推奨する資格について【企業質問7】

アンケートに回答したすべての企業からの回答である。20 件を超えた代表的な資格のみ示す。情報処理技術者試験(23)、電気主任技術者(31)、技術士(24)、土木施工管理技士(24)、建築士(20)などとなっている。

(7) 入社時に TOEIC のスコアを考慮しているかどうかについて【企業質問8】

アンケートに回答したすべての企業からの回答である。“考慮している”と回答した企業が 14%であり、そのうち、スコアは“500 点”が 45%，“400 点”が 32%であり、400 から 500 点付近が入社時に必要であると考えられているようである。専攻科の修了要件の 400 点は、語学力を考慮している企業にとっては少し物足りないのかもしれない。

(8) 入社時に情報処理の能力を考慮しているかどうかについて【企業質問9】

アンケートに回答したすべての企業からの回答である。“考慮している”と回答した企業が 60%であり、そのうち、CAD、表計算などの“ワープロ等の基本的な能力を超えた能力が必要”とした企業が 58%であった。これは、設計や開発を期待されていることから考えて当然の結果であろう。

(9) 今後、専攻科からの採用を考えているかどうかについて【企業質問 10】

アンケートに回答したすべての企業からの回答である。図 4.4 に示すように、“採用したい”が 25%，“現時点ではわからない”が 73%であった。その職種は，図 4.5 に示すように，“研究開発”，“設計”，“施工管理”がほぼ 30%程度で一番多かった。しかし，本科卒業生に比較すると，“研究開発”の割合が多かった。専攻科修士生に対し，特に開発的な仕事を期待している様子がよく読み取れる。

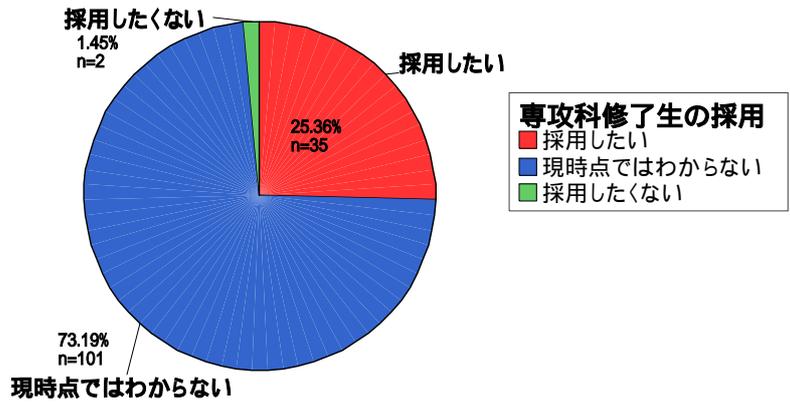


図 4.4 専攻科生の採用について

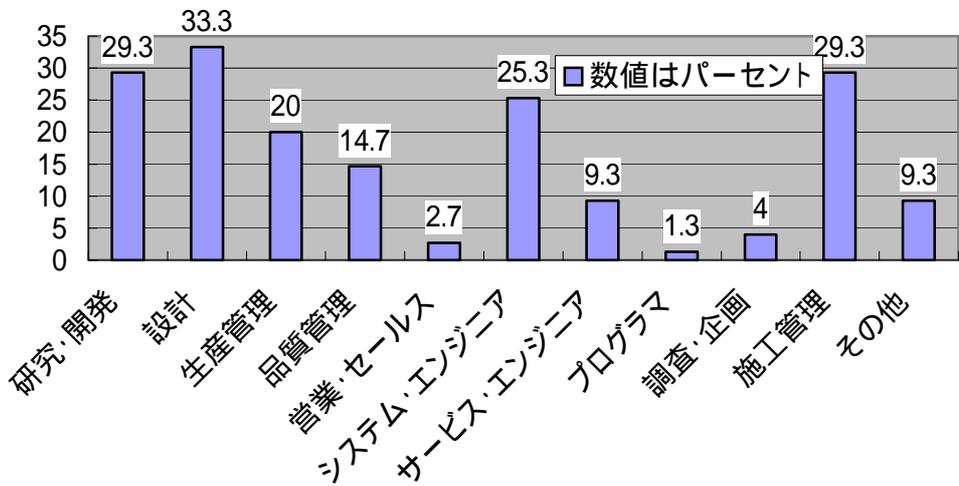


図 4.5 職種

(10) インターンシップについて【企業質問 11】

アンケートに回答したすべての企業からの回答である。現在、インターンシップを“受け入れている”という企業は全体の 10%であった。今後の受け入れに関しては、“今後受け入れてみたい”という企業は 14%，“一度話を聞いてみたい”という企業が 33%であった。なお、インターンシップの受け入れが困難と返答した企業の意見を以下に示す。

- ・ 業務の都合上、受け入れが困難な状況ではある
- ・ 危険・立ち入り規制箇所があるため
- ・ 高専本科生の採用に力を入れており、そちらを優先したい
- ・ 期間が長すぎるため、対応できない
- ・ 3ヶ月の受け入れは、現場の負荷が大きく困難

4.3 本章のまとめ

本章では、徳山高専専攻科修了生に対するアンケート結果に焦点を絞り、本科卒業生との比較を行いながら社会的な評価について検討した。

徳山高専の専攻科修了生の平均的な仕事（勤務成績）に対する評価では、採用した企業の約 3分の 2 が勤務成績は良好であると評価している。また、徳山高専の教育目標に見合うだけの実力がついているかについては、6項目すべてにおいて4段階評価の“3”が7～80%あり、本校の教育目標に見合った実力が概ね身についていると判断されている。徳山高専の複合教育についても、“適切である”と答えた企業が 82%にのぼり、社会的にもその有効性が認められていると思われる。一方、大学の卒業生より優れている点については、専門知識が 42%であるのに対し、“誠実さ”が 65%，“協調性”が 42%であり、高専卒業生の専門性よりも人間的な面を評価されていた。これはアンケート内容を企画した側から見るとむしろ以外な結果であった。しかし、一つのグループとして開発や設計あるいは現場の業務にあたる場合には、これらの素養は非常に重要となるものであり、高学年までホームルームが存在する高専が、大学とは異なる教育効果を生んでいる良い例であろう。

最後に、専攻科生の今後の採用の是非については、すべての企業からの回答であるが、図 4.6 に示すように、“採用したい”が 25%，“現時点ではわからない”が 73%であった。その職種は、“研究開発”、“設計”、“施工管理”がほぼ 30%程度で一番多かった。しかし、本科卒業生と比較すると“研究開発”の割合が多く、特に開発的な仕事を期待している様子がよく読み取れる。

(担当：桜本)

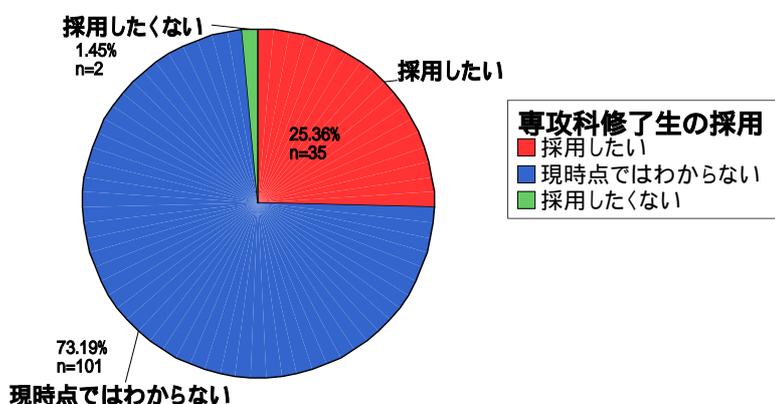


図 4.6 専攻科生の採用の是非

